

マネトン再考

—古代エジプト王朝史記述とその受容—

Manetho Reconsidered:

The Description and Reception of the Ancient Dynasty of Egypt

山 中 美 知

YAMANAKA Michi

Although the original text of *The History of Egypt, Aigyptiaka*, which is written by Manetho, Egyptian historian, is scattered and lost, the extant fragments quoted by later historians have been collected, translated, and reconstructed by historians, e.g. Jacoby, F. or Waddell, W.G., and that we can read almost of them. Recently in *Berosos and Manetho*, 1996, Michigan, Verbrugge and Wickersham reconstruct the contents of *The History of Egypt*. But the contexts in which those later historians have not been fully illuminated yet. It is mainly Jewish and Christian vindicators who quoted *The History of Egypt*, e.g. Josephus or Eusebius. The relevance between their works and Manetho's writings has been interpreted theologically and historically, but these studies focus not on the interaction between their works and Manetho's text, but on each writers and works. This paper will show the contexts in which *The History of Egypt* is quoted by later historians, and reconstruct how they receive it.

In chapter 1, I research on Manetho's biographical data, which has been unknown even in these days, showing his available and significant information from the citations and classical text. I investigate a source of Manetho's writings in comparing between *The History of Egypt* and the documents in Ancient Egypt. In fact, there is determining affinity between these documents of different languages in the Mediterranean.

I trace back to the two bibliographical facts. First, Manetho was the priest in the early Ptolemaic period. Second, he had a literacy of ancient language and a right to read the sacred documents because of his status. Furthermore, I point out that the form of has a similarity with the ancient ancestry of the dynasties, what is called, kings-list.

In the Chapter 2 of the present paper, the writings of the historians who quoted Manetho's writings are discussed, and the differences of the forms of the quoted sentences

and of the description method are classified. It is considered that some Epitomes of The History of Egypt were written not so long after it was written by Manetho himself, and that the historians at posterity had utilized these Epitomes. However, neither these Epitomes exist, nor the authors and the accurate dates of the writings are certain. Therefore, we illustrated what kind of Epitomes exists, and which historians had referred to each Epitomes, comparing each writings of the historians. As a result, the Epitomes can be classified into the two: one of these is that the extracts of the king names, years of the reign, and the main achievements were enumerated in order at the dynasty; and the other is the one that mainly takes up the achievement and was described prosaically. Especially, in the case of the latter, it was clarified that there are some Epitomes which reflects the authors' intention in the description of the achievements, and such Epitomes were, because of their contents, quoted critically by the vindicators of Judaism and the Christianity.

はじめに

『エジプト誌』*Aigyptiaka*は紀元前3世紀にエジプト人マネトンによって著され、エジプト人がギリシア語で自国の歴史を記したものとして、後代の歴史家たちがエジプトの歴史を記す際の重要な素材となった。『エジプト誌』をはじめとするマネトンの著作の原本はすでに散逸しており、後代の歴史家たちの著作に引用されるかたちでのみ伝存しているが、彼らの記述から『エジプト誌』の内容が明らかになっている。そして、近代以降のエジプト学の発達によって、マネトンの記述と古代エジプトの史料の関連が指摘され、その信憑性の有無が明らかになってきた。彼の分類した王朝区分などはエジプト学の根幹を支えるものとして現在も採用されている。

後代の歴史家たちの引用によって伝存する断片はワッデルWaddell, W. G. (Waddell 1940) やヤコビJacoby, F. (Jacoby 1958: 5-112) の手によって収集、翻訳、再構成されている。彼らの業績はそれだけにとどまらず、マネトンの素材となった文献を求めて、古代エジプトやギリシアの様々な史料を提示している。さらに最近ではフェアブリュッゲVerbrugge, G. R.とヴィッカーシャムWickersham, J. M.が (Verbrugge and Wickersham 2001) が、マネトンの著作について内容の再構成を行っている。しかしながら、後代の歴史家がどのようなコンテキストにおいてマネトンを引用したのかについては未だ十分な研究がなされていない。本論文は、マネトンがどのように歴史を記述したのか、そして『エジプト誌』が後代の歴史家にどのように受容されていったのかを再構成することを目的とする。なお、原文から抽出する引用文は、ヤコビとワッデルによるものを使用し、それぞれの分類に従って、ヤコビからの引用のうち証言TestimonyにはT、断片FragmentにはFと表記し、番号を添える¹。また、ワッデルからのものは、断片FragmentをFr.と表記する。

1 これら表記方法はJacoby 1958 *FgrHist* 3にしたがう

マネトンが生きたのは、アレクサンドロス大王死後の後継者争いを経てエジプトに樹立されたプトレマイオス王朝の初期にあたり、プトレマイオス1世ソテル（在位：前305年－前285年）ならびにプトレマイオス2世フィラデルフォス（在位：前285－前246年）の下で建設が進んだ新都市アレクサンドリアを中心として、ギリシア文化が新たな潮流となってエジプトの国土に満ちた時代である。マネトンの生没年や出生地については未だ不明な部分が多いが、まず、現存する史料から彼の活動を考察したい。

I. 年代と著作

1. マネトンの年代

前述したように、マネトンの出自や生没年についての詳細は明らかでないが、彼の活動に関する記述は後代の歴史家たちの著作にみられる。それらによると、マネトンはセベンニトス（下エジプトのデルタ地帯。プシリスの北）の神官であり、その活動期間はまずプルタルコスPlutarchusによって言及されている。

T3 「プトレマイオス・ソテルは夢の中でプルトンの像をみました。彼はそれまで本物を一度もみたことがなかったので、それがどんな像であるかは知りませんでした。しかしとにかくそのプルトンの像が彼に、一刻も早くアレクサンドリアへ連れて行けと命じたのです。…（中略）…そして運ばれてきたのを検分した結果、信託や前兆の解釈者であるティモテオスと、ナイル河口セベンニトスのマネト、および彼らの一統の者たちが、これはプルトンの像であると断定しました。…（後略）…」(Plutarchus *De Iside et Osiride* 361F－362A), 訳文：(柳沼 1996：55-57)

セラピス神はエジプトの神オソラピスとゼウスなどギリシアの神々が混合した新しい神で、プトレマイオス1世ソテル時代にアレクサンドリアを中心に信仰されるようになった。上記の引用はその由来を伝えるものであり、セベンニトスのマネトンがセラピス神の導入に助力したと考えられる根拠である。

また、プトレマイオス3世エウエルゲテス時代（前246年－前221年）にいたる史料としては以下のパピルス文書があげられる。

T2 「高位神官ペトシリオスより監督官ドーリオンへ。私はコイアク（の月）に、神殿の印章について、あなたへ先の報告書を作成しました。ケスメーネスと彼の息子セムテウスがアテュル（の月）の9日にそれを盗用し、彼は、マネトンや他の誰にでも手紙を書くことを望むなら何にでもこれを行いました。」(*Papyrus Hibeh I*, 72, 4-6.)

マネトンという名前はエジプト語名のギリシア語表記であり、これに該当する人物名はセベンニト

スのマネトン以外では確認されていない。したがって、「セベンニトスの」とは記されていないが、ここに記述されたマネトンを『エジプト誌』の著者であると考えれば、マネトンは紀元前4世紀末から紀元前3世紀半ばに活動した人物であると推定しうる。

2. 著作と『エジプト誌』

マネトンは、『エジプト誌』の他に『自然学説要約』、『祭りについて』、『古代の儀式および宗教について』、『キフィの製造法について』、『聖なる書』、『ヘロドトス批判』、『ソティスの書』を著したとされているが、実際には後代の著述家がマネトンの名前に仮託したものである可能性が高い²。『エジプト誌』と同じくあるいはそれ以上に、他のどの著作も断片的な引用によってのみ伝存し、『聖なる書』にいたっては書名だけしか知られておらず、詳しい内容は不明である。

3. 『エジプト誌』の執筆年代と構成

(1) 執筆年代

マネトンが『エジプト誌』をどの時期に執筆したのか、彼自身はそれについて言及していないが、シンケルスSyncellus（800年頃）が年代に関して以下のように記述している。

T11c 「カルデア人の王国がネブロードによるものだというのは明らかであるが、それと同様にエジプトの王朝に関してセベンニトスのマネトンによってプトレマイオス（2世）フィラデルフォスへと書かれたこと（内容）は虚偽に満ちていることも明らかである…（後略）」
(Syncellus, *Ecloga Chronographica*, 29-30.)

この引用から、『エジプト誌』がプトレマイオス2世フィラデルフォスに献じられたものであり、執筆年代がこの王の在位期間中であつたと推測しうる。

(2) 『エジプト誌』の執筆

マネトンが『エジプト誌』の執筆にあたって用いた史料についての言及は、ヨセフスFlavius Josephus（37年－100年）の『アピオンへの反論』*Contra Apionem*にみられる。それによると、マネトンは『エジプト誌』を記述する際の素材を ἐκ τῶν ἱερῶν γραμμῶν 「聖なる書物の中から」求めたという³。マネトンは古代エジプトにおいて識字階級であつた神官職に就いていたことから、彼がエジプト語で記された碑文・文書を読む知識を持ち、かつ、神殿付属の書庫に収蔵されている文献を用いることが可能な立場にあつたことは確かであろう。したがって、この聖なる書とは、ヒエログリフに代表されるエジプト語の史料を示していると考えられる。

マネトンは古代エジプトの歴史を王統の系譜ごとに30ないしは31の王朝 δυναστεῖα に区分し、各

² Waddell 1940: xiv-xv.

³ Waddell 1940: 118, f.54

王朝に番号を付した。この王朝区分が現在でも採用されているのであるが、歴代の王をそれぞれの治世年数と、時にはその事績もあげて列挙するという方法は、古代エジプト王朝時代にしばしば編まれた王名表の記述と類似している。王名表とは、王名を称号とともに列挙したものを指す。現存するものでは、まず第5王朝期の碑文「パレルモ・ストーン」⁴、第18王朝トトメス3世時代のカルナクのアメン神殿に刻まれた「カルナクの王名表」、アビュドスにある第19王朝期のセティ1世葬祭神殿の「アビュドスの王名表」などがあげられる。これらは主に神殿の壁面や石碑に刻文されたもので、当時の為政者が自らの王統の連続性や王権の正統性を主張することを第一義としたものである。次に第19王朝の書記テンロイ「サッカラの王名表」に代表されるような私人墓内に描かれたものや、供物卓の碑文などにみられるもの⁵、そして、パピルス文書である「トリノ王名表」などがある。これら現存するものの中で、「パレルモ・ストーン」と「トリノ王名表」は、ともに第1王朝以前に神話上の神々による統治時代を設定していることなどから、マネトンの『エジプト誌』との関連が指摘されてきた⁶。特に「トリノ王名表」は最も注目される史料である。

「トリノ王名表」はラメセス2世（在位：紀元前1280年頃－1210年頃）時代に行政文書の裏面に記されたもので、これ自体がさらに古い時代に書かれた原本からの写本である可能性が高い。前述したように、王名表のもつ性質がまず王統の正統性を主張することにあるがゆえに、作成する為政者にとって適切でないと思なされた王統や王名が削除される例がみられる。このため実際の歴史とは必ずしも一致しない場合があるが、この「トリノ王名表」には、他の王名表では存在が消されている異民族ヒクソスの王名が記載されるなど、マネトンの記述との関連性への指摘が多くなされてきた⁷。

また、王名のエジプト語からギリシア語表記への変換においても、王名表との関連性がみられる。古代エジプトにおいては、1人の王に5つの名前が呈されるのが通例であるが、マネトンは概ねそのうちの即位名ないしは誕生名を表記に使用したと考えられる。これに関してはフェアブリュッゲとヴィッカーシャムが4つに分類している（Verbrugghe and Wickersham 2001：109-115）。以下へ表にあらわし、例を挙げる。

1表 王名のギリシア語表記の分類
(Verbrugghe and Wickersham. 2001による)

1	<i>mn</i>	Μήνης
2	<i>snd</i>	Σεθένης
3	<i>en-nbw</i>	Ουενέφης
4	王名	不明

4 1916：161-214, Breasted 1988：§§76-167.

5 カーネクベト (TT2) *KRI*, vol.3,: 806-807, アンヘルカーウ (TT359) *KRI*, vol.4, : 184-185, イミセバ (TT65) *KRI*, vol.6, : 548-549

6 Málek 1982:93-106

7 Málek 1982:93-106

1. ギリシア語への翻字が容易なもの

例えば第1王朝初代の王メンmnは長母音のηが加えられ、ギリシア語表記Μήνηςとなる。

2. 子音の変換がみられるもの

この分類には、ギリシア語には無い子音を表記するために、エジプト語の子音をギリシア語の子音に近い音へ置き換えたもののほか、変換の過程が比較的容易にみてとれるものが相当する。表に挙げた例ではまずd (dj) の音をθに置き換え、さらにnとdの順序を入れ替えて表記している。

3. 音節の取捨選択による省略がみられるもの

en-nbwは、bがφに、wがouへと置き換えられ、さらにouが語末から語頭へ移動している。また、重複するnのひとつが省略されている。

4. ギリシア語表記が5種類の王名のどれにも相当しないもので、変換の過程がはっきりしないものが該当する。

「トリノ王名表」と『エジプト誌』の関連性は、マネトンが記述した第15、16王朝の王の人数が「トリノ王名表」中のヒクソス王朝を記述した箇所を再構成することで一致をみせるという見方がなされている⁸。しかしながら、王の人数や治世年数などに違いがみられることやこのパピルス自体が近代になってからの破損が激しく解読が困難な部分が多いことから、この王名表が直接『エジプト誌』の素材になったかは明らかでない。だが、その基本的な構成の一致から、これに類する王名表がマネトンの執筆に寄与したとは考察しうる。

(3) 『エジプト誌』の構成

全3巻から成る『エジプト誌』は時代順に配置されており、各巻が含む王朝は以下の通りである。

第1巻 神話の時代から第11王朝（前3100年頃⁹～前2000年頃）

第1王朝に先立つ先王朝時代は、神々や半神、そして死者の魂の時代であり、約1万年間に及んだとされる¹⁰。この中には、オシリス、テュボン（エジプト名：セト）、ホルスという順番で王位が継承されている記述がみられ¹¹、プルタルコス『イシスとオシリスについて』との関連性が指摘できる。そして、人間たちの王朝である第1王朝から第11王朝までは約2300年間と計算されている。

第2巻 第12王朝から第19王朝（前2050年頃～前1190年頃）

この巻は、異民族ヒクソスによる支配時代や国力の最盛期である第18・19王朝を含み、モーセによる出エジプトへの言及や、後述するヨセフスの記述など多くの資料を含む。

第3巻 第20王朝から第31王朝（前1190年頃～332年）

アレクサンドロス大王のダレイオス3世に対しての勝利までを記している。第20王朝以後のエジ

8 Málek 1982:93-106

9 第1王朝の開始年代

10 T8a

11 T8a

プトは東地中海沿岸への影響力を次第に失い、たびたび異民族の支配を受ける時代である。この巻には、そのような異民族が建てた王朝についても言及されている。

II. 『エジプト誌』の受容

1. 歴史家たちによる引用

『エジプト誌』がマネトンによって書き上げられ、歴史家たちによって引用されるまでの期間に、Epitome「大要」が作成されたと考えられる。その著者や作成年代は不詳であるが、Epitomeは唯一の版ではなく、いくつか存在したと考えられる。なぜならば、引用に見られるその内容は、『エジプト誌』に記述された王名、治世年数、主な業績を抜粋したものであり、後代の歴史家たちはこれを用いたと考えられ、同一の版によるとみられる説明や間違った記述がみられる。ここでは歴史家たちの引用記述にどのような類似と差異がみとめられるか、またどのようなコンテキストにおいて引用されているのかを検証し、彼らを用いたEpitomeがどのようなものであったのかを検証する。

著作のなかで『エジプト誌』を引用したと考えられるのは、ヨセフス、アフリカヌスAfricanus（3世紀）、エウセビオスEusebius（263/65-339/40）、テオフィルスTheophilus（不詳-181/188没）、アイリアノスAelianus（165/70-230/5）、ポルフィリオスPorphyrius（233-309）、マララスMalalas（491-578）らである。彼らによって引用された文章から考えられる『エジプト誌』の形態は大きく2つに分類することができる。①古代エジプトの王朝ごとに王名、治世年数、主要な事績・出来事を列挙するという手法をとるもの。そして②王名、治世年数、主要事績を文章におり込み、散文的に記述したものである。

(1) 記述形態①

現存する引用テキストの多くがこの形態をとっているが、ほとんどが断片的であり、前述した王名表と同じような構造を持ち、かつ包括的な記述が伝わっているのは、アフリカヌスの『年代記』*Chronografiae*とエウセビオスの『年代記』*Chronicon*のみである。したがって、本論文では②と比較しうる史料として彼らの引用テキストを考察の対象とした。アフリカヌスの『年代記』とエウセビオスの『年代記』は、ともにシンケルスによる引用によって伝わっている。さらにエウセビオスの『年代記』にはアルメニア語版が存在している。これらのテキストは王名や治世年数、記載事項など、細かな点で異なる部分が多い。これらにみられる記述の中で、各王朝について最も詳細に記述しているのは、アフリカヌスの『年代記』である。エウセビオスの『年代記』はシンケルス版、アルメニア語版ともに多くの王名や事績の省略がみられる。そして、内容自体が大きく取り違えられている箇所もみられるのである。これら記述の差異が最も顕著にみられる第15から第17王朝の表を示すと以下ようになる¹²。

12 Fr.43-48b

2表 第15王朝

(Waddell 1940による)

	アフリカヌス (syn)	エウセビオス (syn)	エウセビオス (Arm.)
1	サイテース 19年	ディオスポリス出身の 王たちが250年統治	ディオスポリス出身の 王たちが250年統治
2	ブノーン 44年		
3	バクナン 61年		
4	スタアン 50年		
5	アルクレーヌ 49年		
6	アフォーフィス 61年		
	合計 284年	合計 250年	合計 250年

3表 第16王朝

(Waddell 1940による)

アフリカヌス (syn)	エウセビオス (syn)	エウセビオス (Arm.)
異なる羊飼いの王たち32人。 彼らは518年統治した。	テーベ出身の王5人。 彼らは190年統治した。	テーベ出身の王5人。 彼らは190年統治した。

4表 第17王朝

(Waddell 1940による)

アフリカヌス (syn)	エウセビオス (syn)	エウセビオス (Arm.)
再び羊飼いたちの王が43人と、 テーベないしはディオスポリスの王43人。羊飼いたちの王と テーベの王の統治の合計、151年	サイテース 19年	サイテース 19年
	ブノーン 40年	ブノーン 40年
	アフォーフィス 14年	アルクレス 30年
	アルクレーヌ 30年	アフォーフィス 14年
	羊飼いたちと兄弟たちの王朝。彼らはフェニキアで異国の王たちであり、メンフィスを掌握した。	羊飼いたちと兄弟たちの王朝。彼らはフェニキアで異国の王たちであり、メンフィスを掌握した。
合計 151年	合計 103年	合計 103年

第15王朝から第17王朝は異民族ヒクソスが下エジプトのアヴァリス（現：テル・エル＝ダバア）を中心に勢力を拡大した時期である。第15王朝と第16王朝は彼らによるものと考えられており、後述するヨセフスにも言及されている王朝である。まず、アフリカヌスの記述は治世年数などで違いがみられるものの、王の人数や名前の一部がトリノ王名表に一致する¹³。しかしながら、エウセビオスはシンケルス版においてもアルメニア語版においても第15王朝と第17王朝の記載が逆になっている。さらに、第17王朝の支配者への言及においては、「羊飼いと兄弟」と記述しているが、アフリカヌスでは「羊飼いの王とテーベないしはディオスポリスの王」と記されている¹⁴。第17王朝は、勢力を失いつつあった下エジプトのヒクソス勢力と、上エジプトのテーベを中心としたエジプト人の王朝が並立していた時期であることから、ここでもアフリカヌスの記述の方がより正確だといえる。また、シンケルスはエウセビオスによる『年代記』の第6王朝の記述に、「エウセビウスはアフリカヌスに比べて、王の数や名前の省略、年代において正確ではない。事実上エウセビオスはアフリカヌス

13 Verbrugge and Wickersham 2001: 185-203, Málek 1982

14 Fr.47

の言葉の繰り返しである」と書き加えている¹⁵。第1巻末の第11王朝の記述に添えられた、第1王朝から第11王朝までの合計年数はこのシンケルスの言を裏付けるものである。そこでアフリカヌスは合計年数を2300年と70日間としているが、この数字は実際に彼が王朝ごとに記載した統治年数の合計である2280年と70日とは計算が合わない。しかしながら、エウセビオス『年代記』ではこの2300年を踏襲し、これもまた計算が大きく合わないながら¹⁶、シンケルス版では2300年と79日間、アルメニア語版では2300年間と記述されている。アフリカヌスによる合計年数が実際の計算と合わないことがいかなる理由—単純な間違いか、もしくは別の写本に従ったのか—は判断できないが、エウセビオスに関しては明らかにアフリカヌスの計算に符号させる意図がみえる。このような数字上の操作は度々みられ、それらはアフリカヌスとエウセビオスとの間だけでなく、同じエウセビオス『年代記』のシンケルス版とアルメニア語版でもみられる。アルメニア語版は第19王朝の年数を合計194年としているが、これは各王に付された統治年数の合計162年と30年の差がある。そして194年とは、シンケルス版が記述した年数と一致するのである。こちらは各王の統治年数と計算が合うことから、アルメニア語版はシンケルス版と符号するように数字を操作したことの証左であるといえる。

では、これら記述の差異はどのような理由によるものであろうか。まず、前述の考察と著者の生没年代から、アフリカヌス、エウセビオス（シンケルス版）、エウセビオス（アルメニア語版）という順で著されたと考えられる。そして、記述内容の違いから、アフリカヌスとエウセビオスが参照した『エジプト誌』の写本が、異なるEpitomeであると考えられる。無論、エウセビオスがアフリカヌスを参照していたことは考察の結果明らかであるが、エウセビオスにはわずかながらアフリカヌスにはない事項も含まれている。例えば、第12王朝の記述には、「第3代の王が4キュービット3パーム（約230cm）の横幅のある像を建造した」とあるが¹⁷、アフリカヌスには同様の記述はない。また、出エジプトの年代についても彼らの記述は異なっている。アフリカヌスは、出エジプトが第18王朝初代の王アモーシス（あるいはミスフラグムートーセオース。後述のヨセフスではテトモーシス、ミスフラグムートーシスと表記）の治世下で行われたとしているが、エウセビオスでは、第9代目のアケンケルセースの治世下で行われたと記している。これらのことから、エウセビオスは何らかのEpitomeに類する史料とアフリカヌスの『年代史』を併せて参照したとも考えられる。したがって、アフリカヌスとエウセビオスの記述が異なる『エジプト誌』の写本ないしはEpitomeの系譜からのものであると考えられるのではないか。

(2) 記述形態②

この分類に属し、最も古いと考えられる引用は、ヨセフスによるものであろう。彼は紀元後1世紀に『ユダヤ古代誌』*Antiquitates Judaicae*を著したが、これに対して起こった批判に反駁するかたちで『アピオンへの反論』*Contra Apionem*と題した2巻からなる著作を発表する。表題にあるアピオンは、当時、反ユダヤの急先鋒だった人物である。彼はユダヤ民族を歴史の浅い劣等民族と

15 Fr.21a

16 約500年、Fr.21aの注記にある版の違いによっては300年の違いがある。

17 Fr.35

決めつけ、『ユダヤ古代誌』の攻撃、中傷を展開した。『アピオンへの反論』は、ユダヤ民族がいかに歴史古く伝統ある民族であるのかの証左を、反ユダヤの中心的存在であったギリシア人やエジプト人をはじめとする異民族自身の歴史記述に求め証明することによって、彼からの批判を論破しようとするものであった。そして、ヨセフスがその証拠の一つとして提示したのが『エジプト誌』であった。『アピオンへの反論』で、マネトンについて言及しているのは、第15王朝から第18王朝（現代の王朝区分では第19王朝に属する王名も含む）にかけての時期に関してである。

2. ヨセフスの記述する『エジプト誌』

ヨセフスはまず、自らの主張が先人の歴史記述に依るものであるとの典拠を示す。

「マネトン自身、『エジプト史』の第二巻で、わたしたちについて書いている。わたしは、彼自身を証人として尋問しているものと見なし、彼の言葉をそのままに引用しよう。

テュティマイオス王の御代のこと。わたしにはその理由がわからないが、神は怒りの息吹きをわたしたちに吹き込まれた。すると、突如として、東の方から素性の賤しい者たちがあらわれ、不敵にもわたしたちの国に侵入し、その主力はやすやすと、戦闘をすら交えずに国内を占領してしまった…（中略）…（82）さて、この民族は、〈王の羊飼い〉という意味のヒュクソースという名で総称された。〈ヒュク〉は、宗教用語で王を意味し、〈ソース〉は、日常用語で羊飼い、あるいは羊飼いたちを示しそしてそれらが合成された結果、〈ヒュクソース〉という語が生まれた。」（*c.Ap. I,74-82*），訳文：（秦 1977：70-72）

ここで彼はマネトンの記述をそのまま引用すると述べ、続いて第2中間期（前1650年頃～前1550年頃）に、ナイル河下流のデルタ地帯で第15・16王朝を樹立したヒクソスと呼ばれるパレスチナ民族に関する記述を引用し、ヒクソスがユダヤ人の祖先であるという説を主張する。現代の研究ではヒクソスとは「外国（人）の支配者たち」という意味だと解釈されているが¹⁸、ヨセフスは参照した写本の記述に従って、ヒクソスが「羊飼い」「王」を表しているという記述に注目し、牧羊を行っていたユダヤ人と関連させたのであろう。そして、ヒクソスがテーベの王との戦いに敗れてエジプトを去る、つまり出エジプトを示すマネトンの記述を以下のように引用している。

「この和平のとりきめにしたがって、財産を携え、家族をとともども二十四万をこえる人々は、エジプトを後にし、…（中略）現在、ユーダイアと呼ばれている国に、一行のはなはだ多数の人間を定着させるに足るポリスをつくりあげ、それにヒエロサリュマ（エルサレム）という名を与えた。」（*c.Ap. I,89-90*），訳文：（秦 1977：74）

そしてヨセフスは、マネトンが再び出エジプトに関しての記述を挙げているとして、以下のように

18 Erman, und Grapow 1982：173

述べている。そこに記述された内容は、上記の内容とはほど遠く、ユダヤ人たちにとって屈辱的な内容であった。

「エジプト史をその聖なる書から訳すと約束したこの著者（マネトン）は、わたしたちの祖先が、エジプトに大挙して侵入しその地の住民たちを征服したことをまずもって語り、次に、わたしたちの先祖が後になってその国から追い払われて、現在のユダヤと呼ばれている地域を占領し、エルサレムを建設して、神殿を造営したことを自ら認めている。

さて著者は、ここまでは、もろもろの記録にしたがっていた。ところが著者は、ここから先、ユダヤ人たちにに関して言われたり語られたりしていることを書き留めておくという口実で、勝手気ままに、とても信じられないような話へと移り、私たちの先祖は、多くのエジプト人中のレプラ（癩病）患者その他の疫病やみで、エジプトの地から追放を宣言されたものたちと一緒に生活していたと説明しようとするのである。

まず彼（マネトン）は、アメノーヒスという王をつくり出す。架空の名前であるから、その治世の年代はさすがに控えている。彼の挙げている他の王については、すべて正確な年代を与えているにもかかわらず、である。…（中略）…

そして彼（アメノーヒス）は彼ら（病人たち）を他のエジプト人たちからは全く隔離されて働くことができるナイル川の東の採石場に送り出した。マネトーンによれば、その中には、レプラに苦しむ何人かの学問のある神官たちも入っていた。…（中略）…

（マネトンの引用へ続き）

彼らは…（中略）オサルフォスと呼ばれたヘーリオポリスの神官たちの一人を彼らの指導者に立て、すべてのことにおいて彼の権威に服することを誓った。…（中略）…

（オサルフォスと呼ばれていたこの神官は）この民族の仲間に入ったとき、その名は改められ、モーセと呼ばれたそうである。」（*c.Ap.* 228-250）、訳文：（秦 1977：119-126）

このヨセフスの記述から明らかになのは、出エジプトに関する記録が全く性格の異なる内容で繰り返されており、前者は対等な戦いの敗者としての堂々とした退去であるのに比べ、後者にはユダヤ民族が隔離され、ともに隔離されていたエジプト人癩病患者の一人がモーセであるという、ユダヤ民族に悪意ある内容であるということである。ヨセフスはマネトンの記述を「彼の言葉をそのままに引用しよう」（*c.Ap.* I,74）と前置きしているが、フェアブリュックとヴィッカーシャムはヨセフスの引用した『エジプト誌』の記述が、マネトンの原本からのものであるか疑問を呈している¹⁹。

出エジプトに関する2種類の記述の中で、前者には①の分類方法に類似する記述をもった箇所が指摘できる。そこでは第18王朝の系譜が王名、治世年数とともに年代順に列挙されている²⁰。王名

19 Verbrugghe and Wickersham 2001 : 103-107

20 F9a

や治世年数の詳細は若干の差異が認められるものの、①の分類において前述したアフリカヌスやエウセビオスの記述方法とほぼ同様である。このことから、ヨセフスは、マネトンの原本ないしは①に類するEpitomeと、反ユダヤ思想をもった記述家の記したEpitomeという2種類の史料を用いたと考えられる。これによって、内容の違う2つの出エジプトが併記されることになったといえるのではないか。

ヨセフスの『アピオンへの反論』からつづくこのような記述方法をとるのは、テオフィルスである。彼の著作の一つ『アウトユリコスに送る』*ad Autolyicum*はヨセフスがユダヤ民族に対する批判に対して『アピオンへの反論』を著したのと同様に、キリスト教に対しての疑問や批判に弁駁したものであった²¹。この中でテオフィルスはマネトンの『エジプト誌』がいかに虚偽に満ちたものであるかを提示しているのである²²。

『エジプト誌』はマネトンによって著されてからさほど間をあけず、幾つかのEpitomeが作成されたが、それらは抜粋という形をとるものと、作成者の意図が反映されたものが存在した。前者はマネトンがヒクソスをはじめとする異民族の支配者について客観的な視点を有していたことを示している。後者はマネトンの客観的な視点に裏づけされたが故に、信憑性をもって用いられたのではないだろうか。そして、後代の歴史家たちはこれら種々のEpitomeの記述に自らの立場や見解を加え、マネトンと『エジプト誌』を理解しようとしたといえるのではないか。

おわりに

古代エジプト人は自らの歴史を、王名表をはじめとする様々な方法によって記述したが、それらは断続的で、かつ為政者や私人の思惑によって改ざんされたものも多く含まれていた。しかしながら、マネトンがヘレニズム時代に広く使用されたギリシア語で自国の歴史を包括的かつ客観的に記述したことによって、歴史記述が伝存した成果は大きい。なぜならば現代ではすでに散逸してしまった史料への言及が保存されており、エジプト学の根幹に寄与しているのである。

そして、マネトンの著作はユダヤ教・キリスト教歴史家たちによって非難・疑問視されながらも、聖書との関連性を指摘しうる史料として受容されたのである。

主要参考文献

- 上智大学中世思想研究所編訳/監修. 1992-1999. 『中世思原典集成』 1-5巻, 平凡社。
 フラウィウス・ヨセフス. 1977. 『アピオンへの反論』, 秦剛平訳, 山本書店。
 ————. 1999. 『ユダヤ古代史』 I-II, 秦剛平訳, 筑摩書房。

21 上智大学中世思想研究所 1995: 100-104

22 上智大学中世思想研究所 1995: 176-180

- ブルタルコス. 1996. 『エジプト神イシスとオシリスの伝説について』, 柳沼重剛訳, 岩波書店。
- Babbitt, F.C. 1936. *Plutaruch, Moralia*, vol.1, Cambridge, Mass., and London, Harvard University Press.
- Breasted, J.H. 1998. *Ancient Records of Egypt*, vol.1, London, University of Chicago Press.
- Daressy, M.G. 1916. “La Pierre de Palerme et la chronologie de l’ancien Empire”, *Bulletin de l’Institut Français d’Archéologie Orientale (BIFAO)*, 12, pp.161-214.
- Erman, A. und H. Grapow. 1982. *Wörterbuch der ägyptischen Sprache (Wb)*, Bd.3, Berlin, Akademie Verlag.
- Helck, W. und E. Otto. 1980. *Lexikon der Ägyptologie*, Bd.3, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Jacoby, F. 1958. *Die Fragmente griechischen Historiker (FgrHist)*, vol.C, Leiden, E. J. Brill.
- Kitchen, K. A. 1975. *Ramesside Inscriptions : Historical and Biographical (KRI)*, vols.1-6, Oxford, Blackwell.
- Málek, J. 1982 . “The Original Version of the Royal Canon of Turin”, *The Journal of Egyptian Archaeology (JEA)*, 68, London. pp.93-106.
- Tarn, W. W. 1928. “Ptolemy II,” *The Journal of Egyptian Archaeology (JEA)*, 14, London, pp.246-260.
- Verbrugge, G. P. and J. M. Wickersham. 2001. *Berosos and Manetho, Introduced and Translated*, Ann Arbor, The University of Michigan Press.
- Waddell, W. G. 1940. *Manetho*, Cambridge, Mass., and London, Harvard University Press.